

TOBUNKEN NEWS

2011
no.45



独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

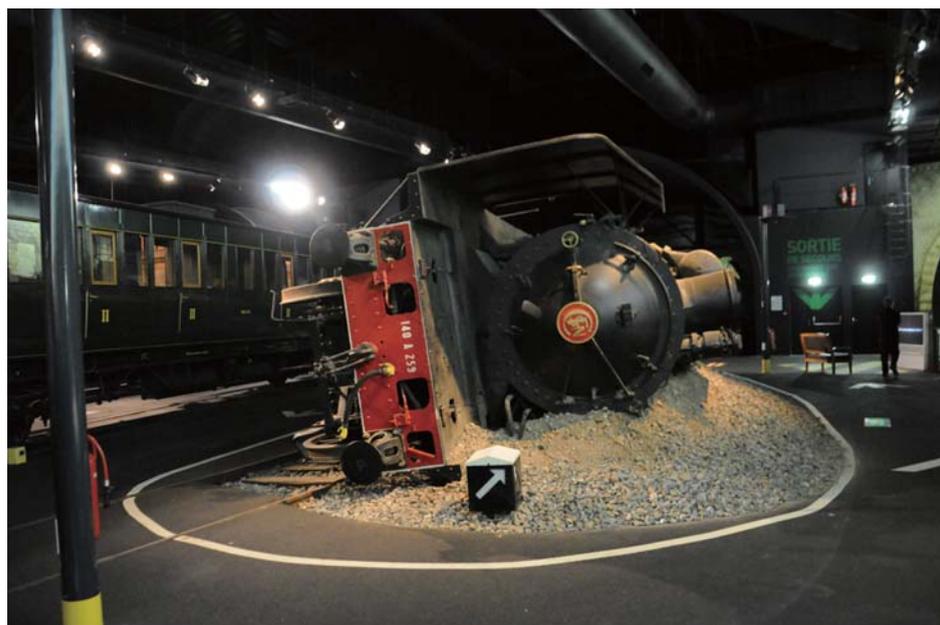
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43 <http://www.tobunken.go.jp>

フランス、スイス及びドイツの 近代文化遺産の保存状態に関する 現地調査について

保存修復科学センターでは、3月8日から14日まで、フランス及びスイスにおいて鉄道、自動車、及び航空機等の保存、修復に関する現地調査を、またドイツにおいて、溶鉱炉の保存現場の調査を実施しました。

フランスにおいては、ミュールーズにて国立鉄道博物館及び国立自動車博物館の調査を実施

しました。共に収蔵している鉄道車両及び自動車の多さは目を見張るものがあります。鉄道車両に関しては、展示環境も余裕を持った配置になっており、鉄道関連博物館によく見られる狭苦しさを感じられませんでした。各鉄道車両に関しては、屋内に保存されている事もあり、保存状態は良好でした。塗装については、やはり来館者の目を意識してかきれいに塗り直されており、その点は多少残念では有りました。しかしながら展示の仕方にも種々の工夫が見受けられ、リピーターを呼べる施設だと感じました。



大戦中、レジスタンスの破壊工作により脱線したという状態を再現した展示
(フランス・ミュールーズ国立鉄道博物館)

自動車博物館については、元々個人所蔵の自動車がベースになっているせいか、どれもきれいで自動車好きの人にはたまらない博物館という感じです。もちろん保存状態もかなり良いのですが一点だけ、タイヤの保存状態に関して、かなりの車が直接タイヤで支持している状態が見受けられタイヤの傷みが気になりました。

スイスでは、ルツェルン湖のほとりに立地する交通博物館の調査を実施しました。2000平米を超える敷地の中央に子供達が遊べる広場を配し、廻りに展示館を廻らした博物館で、交通に関する事物を収蔵しており、かなり見応えのある博物館です。全体としては、やや雑多な感じは否めませんが、一カ所でこれだけのものを見る事が出来るのは幸せな事だと思います。展示物に関しては、やはり鉄製のものが多く、来館者が触る部分の防錆に苦勞しているようです。

最後にドイツにおいて製鉄所を調査しました。ヨーロッパでよく見るスタイルですが、ほとんど操業を終えたそのままの姿を保存してい



整然と並んだ自動車
(ミュールーズ国立自動車博物館)



道路標識を外壁のアクセサリとしている
スイス・ルツェルン交通博物館

る状態で、ある意味非常に興味深い施設ではあります。唯一手を入れているのは観覧者の



修復作業中の観光潜水船（ルツェルン交通博物館）

安全の為に施設（手すり、エレベーター、歩廊）であり、その他は手つかずの状態で見ることが出来るのは非常に興味深いし、面白いものだと感じます。日本では、火災等の避難経路等、法律上の制約が多く保存の仕方や法制度など、保存を考える上で難しい課題が多いと感じました。

（保存修復科学センター・中山俊介）

日韓共同シンポジウム 「人とモノの『力学』」 —美術史における『評価』の開催

2月27日に、当研究所において表題にあるシンポジウムを開催しました。『美術研究』（1932年創刊）は、当研究所企画情報部が、また『美術史論壇』（1995年創刊）は、星岡文化財団韓国美術研究所が刊行している学術誌です。韓国美術研究所長の洪善杓博士は、『美術研究』の海外編集委員を委嘱している関係から交流があり、博士の尽力もあって実現したシンポジウムでした。当日は、はじめに洪博士の



ディスカッションの様子（ソウル会場）

「国史形美術史の栄辱—朝鮮後期絵画の解釈と評価の問題」と題する基調講演がありました。続いて韓国側からは、張辰城（ソウル大学校）、文貞姫（韓国美術研究所）両氏、当研究所からは、綿田稔、江村知子の両名の発表の後、美術史における「評価」という重要な問題を取りあげて、ディスカッションが行われました。当日のプログラムと各発表の題名は下記のとおりです。

綿田稔（当研究所企画情報部）

「山水長巻考—雪舟の再評価にむけて」



洪博士による基調講演（東京会場）

張辰城氏（ソウル大学校）
「愛情の誤謬—鄭敷への評価と叙述」

江村知子（当研究所企画情報部）
「江戸時代初期風俗画の表現世界」

文貞姫（韓国美術研究所）
「石濤、近代の個性という評価の視線」

当研究所での開催に引き続き、3月12日には、タイトルを「視線の『力学』—美術史における『評価』」として、ソウルの梨花女子大学校博物館の視聴覚室を会場として行われました。当研究所企画情報部の田中淳による「創作と評価—萬鉄五郎《風船を持つ女》を中心に」と題する基調講演に始まり、東京会場と同じプログラムで各発表が行われました。

折しも前日に起こった東北地方太平洋沖地震の被害を案じながらの開催となりましたが、会場は立ち席が出るほどで東京会場をしのぐ盛況ぶりでした。鄭于澤氏（東国大学校）の司会によるディスカッションでは、個々の発表への質疑応答にくわえ、日韓の美術史研究のスタンスの差異にも話題が及び、国境を超えた国際シンポジウムに相応しい討議となりました。

このシンポジウムは、同じ発表に対して、日韓の参加者の意見の違いをみてみようという「ねらい」もあり、総括的な意見が比較的多かった東京会場と、個別の発表に対する鋭い意見があったソウル会場との違いがみられました。しかし、美術史における「評価」は、日韓の研究者たち双方にとって本質的な問題だけに、両日とも意見交換する貴重な機会となりました。

（企画情報部・田中 淳）

近世風俗画共同研究調査報告会

企画情報部では2009年度より徳川美術館との共同研究として、近世風俗画の調

査を実施しています。2011年1月29日には東京文化財研究所において報告会を開催しました。冒頭には徳川黎明会会長・徳川美術館館長の徳川義崇氏に近年のIT技術の情勢をふまえてご挨拶頂きました。そして江村が「歌舞伎図巻の描写について」と題して、「歌舞伎図巻」（徳川美術館蔵・重要文化財）の細部描写にはこれまでの美術史研究において見過ごされてきた特徴的な表現が認められることを中心に報告しました。次に徳川美術館学芸員・吉川美穂氏が「本多平八郎姿絵屏風の表現について」と題して、「本多平八郎姿絵屏風」（同館蔵・重要文化財）の人物描写を高精細画像のスライドとともに紹介し、画中の葵文小袖を着た女性には、高貴な女性の風俗儀礼・化粧方法の一つである置き眉の痕跡が認められることなどを報告しま



近世風俗画調査研究報告会ディスカッションの様子



地下1階ロビーでの高精細画像展示

した。つづいて徳川美術館副館長・四辻秀紀氏による司会でディスカッションを行い、画像情報に関しては国立情報学研究所研究員の中村佳史氏にも議論にご参加いただきました。

美術史だけでなく、音楽史、芸能史、服飾史、さらに文化財修復に関係する方々など110名を超える参加者を得て、盛況のうちに閉会しました。また会場前のロビーでは上下巻で15mに及ぶ「歌舞伎図巻」の原寸大出力画像も展示し、参加者にご覧頂きました。今後もさらなる調査研究とその情報発信をつとめて参ります。

(企画情報部・江村知子)

『日本絵画史年紀資料集成 十五世紀』の刊行

企画情報部では、5年にわたった研究プロジェクト「東アジアの美術に関する資料学的研究」の成果報告として『日本絵画史年紀資料集成 十五世紀』（A5判、720頁）を刊行しました。本書は室町時代の盛期にあたる15世紀の100年間に、主として日本で制作された絵画に記された銘記類のうち、年銘をともの833件を翻刻し、年代順に集成したもので、1984（昭和59年）に刊行した『日本絵画史年紀資料集成 十世紀～十四世紀』の続篇となります。

文化財に直接書き込まれている銘記類は、文化財の鑑識や制作年代の決定などについての基礎となるだけでなく、銘記を欠く多くの作例の位置づけについての指標となるものです。これを集成することは文化財研究の基礎基盤となると同時に、とかく細分化されがちな研究の再統合を促し、新たな視野を提供するものであることは疑いありません。このような事業は、当研究所が継続的に担うべき重要な任務のひとつで



あると言えます。なお、本書は中央公論美術出版より市販されています。詳細は下記ホームページ等をご覧ください。

http://www.chukobi.co.jp/products/detail.php?product_id=582

chukobi.co.jp/products/detail.php?product_id=582

(企画情報部・綿田 稔)

「博物館資料保存論対策講座」の開催

平成24年度より、大学の学芸員養成課程において「博物館資料保存論」が2単位の必修科目になります。これは、学芸員を目指す学生に、自然科学的基礎をベースとした資料保存に関する知識を求めるとを意味します。しかし、同課程を持つ大学や短大は、現在300を超える一方、この科目に即応出来るだけの専門性を有する人材は限られているのが現状です。そのため、専門外の教員が担当することになり、講義の構成や内容づくりに戸惑うケースが続出するのではと考えました。そこで、開講に向けた準備に役立てていただくことを目的とし、3月8日から3日間、表題の講座を開催し、同科目を担当することが決定した方を対象に、特に保存環境に関連する15コマの講義を行い、必須となる内容についての情報を提供しました。講座には、大学教員や非常勤での担当を行う学芸員など、全国から81名が参加しました。今回はじめて、このような講座を開いたことで、参加者からは好評をいただき、多くの方が持っているある種の戸惑いを幾分解消で



講義の様子

きたのではと思っています。これまで、講座参加者である大学関係者との関係は決して密なものではありませんでしたが、これからは保存環境を研究する部門として、積極的に関わっていかなくてはならないと実感しました。

(保存修復科学センター・吉田直人)

『保存科学』50号の刊行

『保存科学』は主に自然科学的見地に立脚した、文化財保存に関わる当研究所の調査や研究成果を公表する目的で発行されている紀要です。当誌は1964（昭和39）年の発刊以来、着実に発行を重ね、本年3月末に第50号を公表するに至りました。当誌の歴史は、まさに国内における“保存科学”の歴史そのものであると自負しております。“保存科学”（conservation science）という言葉の成立は1952（昭和27）年の保存科学部設立に遡ります。名付け親は、初代部長・関野克でした。そして『保存科学』は、その当時はまだ世間で認知されていなかったこの分野の研究成果を広く発信するために発刊されたものです。現在、この言葉が一般に知られるようになったのは、諸先輩方の絶え間ない努力と苦勞、そして文化財保存に対する情熱によるものであります。今



第1号と第50号の表紙。組織名は変わりましたが『保存科学』の体裁はほとんど変えておりません。

後とも私たちははそれを引き継いで、“保存科学”が社会にとって有益かつ不可欠な学問と認識していただけるように尽力しなければと思っている次第です。

『保存科学』は印刷部数が限られているため、冊子体は関係機関などへの配布のみとなっていますが、私たちの成果は垣根なくオープンであるべきだと思っています。そこで、第1号からの全ての掲載記事をPDF版としてインターネット上で公開しております。第50号についても先日より公開を始めました。ご関心のある方は是非アクセスして (http://www.tobunken.go.jp/~hozon/hozon_pdf.html)、私たちの活動

の一端に触れていただくことを切望いたします。
(保存修復科学センター・吉田直人)

国際研究集会 『復興』と文化遺産』の開催

第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会『復興』と文化遺産』を東京国立博物館平成館において、1月19日から21日の3日間開催しました。このシンポジウムでは、自然災害、紛争、社会変化というそれぞれの状況を背景として、社会の復興あるいは変革過程において文化遺産がいかなる位置付けを与えられ、保存や修復、再建といった文化遺産をめぐる出来事が社会全体に対してどのような効果をもたらしてきたか、について論じることを主題としました。さらに主催者としては、文化遺産保護に関する国際協力はいかにあるべきかについても議論の視野に入れることを意図しました。冒頭に行われた2本の基調講演はこのような開催趣旨を的確にとらえて議論すべき課題をよく明確化し、出席者への共有が図られました。これに続いて、上記3種の背景状況ごとに計3セッションを設け、最後に総合討議が行われました。

歴史学、国際政治、イスラム地域研究の研究



総合討議の様子

者がそれぞれ議長を務めた各セッションでは、伊・中・日における震災復興と文化遺産、紛争からの国家再建過程をめぐるアフガン・ボスニアからの報告、カンボジアの無形遺産、近年の社会変化の中での旧東独・ロシア・ブータン・日本における文化遺産をめぐる状況など、いずれも大変に興味深い報告が続きました。

討議の中では、文化遺産の価値付けや意味とは社会背景や受け手の立場に応じて変化するもので固定的ではありえないこと、人々の生活との関わりにおいて何が復興されるべき文化遺産であるかについての議論がさらに必要であること、などが出席者に共通した問題意識として浮上し、また建築や町並みの再建や復元における専門家の倫理感にも話題が及びました。

このような多様な論点に対して議論の時間が大幅に不足したことなど反省点もありますが、参加者からは、復興という課題を文化遺産保護に関わる側の視点から取り上げたテーマ設定や内容については、各国の専門家が経験や課題を共有する機会として大いに有益であったとの好意的評価をいただくことができました。

本研究集会の詳細な内容については、報告書の今年度刊行に向けて目下準備中です。

(文化遺産国際協力センター・友田正彦)

文化財保存修復国際研修 に関する研究会の開催

文化遺産国際協力センターでは2月2日・3日の2日間にわたり、「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修等の実施に関する研究会」を、東京文化財研究所会議室にて開催しました。本研究会は、当センターが行っている「諸外国の文化財保護に係る人材育成」事業の一環として、国際研修のより効



討議の様子

果的かつ実践的な実施に向け、国内外の研修実施機関との情報共有および意見交換の場として企画したものです。

途上国を中心とする外国からの研修生を対象とした保存修復技術や能力開発の研修に焦点をあて、プログラムの具体的内容や教授方法、さらには研修成果の評価法や問題点などについて、海外4機関および当研究所を含む国内3機関の担当者から報告を受けたのち、これらを踏まえて参加者による意見交換を行いました。

研修実施事例の分析を通じて、いくつかの共通課題が浮き彫りとなりました。主なものとしては、研修事業自体のマネジメント、研修の継続性とプログラム同士の相互連携、研修情報の共有などが挙げられます。

このようなテーマでの研究会は従来あまり行われてきませんでした。今回の成果をもとに今後も様々な機会を通じて、研修方法の改善や多国間での相互連携の可能性などにつなげていきたいと考えています。

(文化遺産国際協力センター・友田正彦)

ドイツにおける文化遺産保護の 人材育成実施機関調査

2月19日～26日の8日間、ドイツ連邦共和国において「海外の文化財保存修復専門

家養成を目的とする国際研修などの実施」および「文化遺産保護に関する人材育成実施機関の活動」に関する調査を行いました。この調査の契機は、前項の「海外の文化財保存修復専門家養成を目的とする国際研修などの実施に関する研修会」です。上記研究会で、時間的制約から深く掘り下げるに至らなかった技術的な保存修復処置を伴う保存修復専門家養成の事例の中でも、特に日本での情報の少ないドイツを選択し、補足調査を行いました。

訪問した機関は、マインツにあるローマ・ゲルマン博物館および研究所、ミュンヘンにあるミュンヘン考古学博物館保存修復ラボとバイエルン州立考古文化遺産修復ラボ、フランクフルトにあるドイツ国際協力公社です。それぞれ市、州、国レベルの機関で行っている人材育成・技術移転の活動・研修についての情報だけでなく、様々な関係者の異なる視点からの問題点等についても伺うことができました。また、ドイツでは保存修復分野のネットワークが乏しく、国内外他機関の保存修復家とのつながりが少ないようです。よって、今回の当研究所による訪問は大変歓迎され、今後とも国際・国内双方の保存修復の人材育成に関する情報共有や協力などの関係を続けていくことを約束しま



バイエルン州考古文化遺産修復ラボにて
研修を受けるインターンの様子

した。

(文化遺産国際協力センター・邊牟木尚美)

文化遺産国際協力コンソーシアム 平成22年度総会および講演会

3月11日に標記総会および講演会「欧州における遺産：非政府的視点から」を開催しました。総会では、コンソーシアムの平成22年度事業報告と、次年度事業計画が報告されました。これに続いて開催した講演会では、欧州の文化遺産保護のために活動するNGOであるヨーロッパ・ノストラの副会長ジョン・セル氏にご講演いただきました。はじめに、多言語や複雑な政治体制などヨーロッパの多様な文化が育まれた背景と、今日の文化遺産保護に係る条約や政策についての説明がありました。続いて、震災を受けたイタリアのラクイラなどにおける危機遺産保全キャンペー



講演会の模様

ンや、優れた保存活動等を顕彰するヨーロッパ・ノストラ・アワードなど、ヨーロッパ・ノストラの活動についてご紹介いただきました。長年に亘って、文化遺産保護に関する連携・協力を推進してきたヨーロッパ・ノストラの経験は、文化遺産国際協力コンソーシアムの今後の活動の在り方を考える上でも大いに参考となりました。

(文化遺産国際協力センター・原田怜)

ミクロネシア連邦における文化遺産国際協力コンソーシアム協力相手国調査



干潮時遺跡調査

文化遺産国際協力コンソーシアムでは2月18日から25日まで、ミクロネシア連邦のナン・マドール遺跡を対象として協力相手国調査を実施しました。この遺跡は92もの人工島とその上に建つ建造物からなっており、6世紀から16世紀の間につくられたと伝えられています。現在でも遺跡の全容は解明されておらず、神秘的遺跡といわれています。今回の調査は、遺跡の現状を調べるとともに、遺跡保護のために何が必要か把握し、我が国の協力の可能性を検討することを目的として行いました。

玄武岩の石柱を重ねてつくられた建造物には、崩壊した部分も多く見られました。その要因としては、自然風化やマングローブなど植物の繁殖が影響していると考えられます。さらには近年の温暖化にともなう水位上昇により、満潮時に水没する遺跡も見られました。このような点について今後詳細な調査を行い、保存管理計画を策定する必要があると考えられます。同時に、遺跡保護に関する現地の人々の理解を深めることも不可欠であると思いました。

いくつかの島や建造物は王の墓や祭儀場であったと伝えられています。遺跡そのものを守るとともに、このような伝承も含めた包括的な保護を図る必要性を強く感じました。

(文化遺産国際協力センター・原本知実)



王の墓といわれるナン・ダウス



ミクロネシア連邦政府側との打ち合わせ

NEACHセミナー"DOCUMENTATION AND SAFEGUARDING OF INTANGIBLE CULTURAL HERITAGE"

この国際セミナーは、ASEAN10カ国＋日・中・韓3カ国で構成される、"NETWORKING OF EAST ASIAN CULTURAL HERITAGE(NEACH)"の枠組みで定期的に行われているもので、今回はマレーシアが-host国となり、3月5日から8日にかけてクアラル

ンプールで開催されました。今回は無形文化遺産がテーマであり、日本からは無形文化遺産部の宮田が招聘され、"Documentation and Archiving of Japanese Intangible Cultural Heritage"というテーマで発表を行いました。参加した各国は、無形文化遺産保護条約に関し



会議の様子

ては締約国・非締約国の別はあったものの、総じて無形文化遺産保護の必要性に関する意識は高く、活発な意見交換がなされました。無形文化遺産部では、今後もこうした機会には積極的に参加し、日本の経験を広く発信したいと考えています。

(無形文化遺産部・宮田繁幸)

アジア文化遺産国際会議 「西アジアの文化遺産— その保護の現状と課題」

3月3日から5日までの3日間の日程で、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、バハレーンのアラブ5カ国の専門家を東京文化財研究所へ招き、日本の専門家と共に各国の文化遺産、その保護の現状について情報を交換し、今後の日本を含む各国間の連携による国際協力による保護活動の可能性について討論する会議を開催しました。

文化遺産国際協力センターは、アジアの各地域について、文化遺産保護のための地域内ネットワークの構築と、日本の貢献を促進することを旨とし、中央アジア（2007年度）、東南アジア（2008年度）、東アジア（2009年度）の各地域の国々による国際会議を開催してきま

した。

今回の会議は、これまで主に考古学や歴史研究での交流が盛んだった西アジア地域について、今後文化遺産保護という視点から新たなネットワークを構築していくための貴重な一歩となりました。

(文化遺産国際協力センター・岡田健)

『無形文化財の伝承に 関する資料集』の刊行



図版頁（『横笛細工試律便覧』）より

平成18年度から始まったプロジェクト「無形文化財の保存・継承に関する調査研究」の成果報告書を刊行しました。

本書では、江戸時代の笛製作に関する技法書『横笛細工試律便覧』、文楽義太夫節の曲節を分類整理した実演集『義太夫節の種類と曲節』、江戸小紋の歴史と製作工程を記した『江戸小紋技術記録』、以上3点の無形文化財の保存・継承に関する資料を紹介しています（ホームページ上でも全頁のPDFを公開する予定）。

(無形文化遺産部・飯島満)

Column

『日本美術年鑑』のこと

現在、東京文化財研究所が編集発行している『日本美術年鑑』は、当該年の美術界の動きを一冊にまとめたもので、「年史」「美術展覧会」「美術文献目録」「物故者」によって構成されています。当所での発行は1936（昭和11）年、美術研究所時代に始められ、戦中戦後の困難な時期にも継続されて今日に至りました。英語圏にArt Indexなど毎年の美術文献目録はありますが、『日本美術年鑑』のように展覧会、文献、当該年の物故作家の略歴を一冊にまとめたものは国際的にも例を見ません。

この独特の構成は、明治大正期に活躍した美術評論家、岩村透（1870－1917）の発案になります。土佐藩士で後に男爵となる岩村高俊を父に、東京に生まれた岩村透は、父の勧めによって美術修学のためにアメリカに私費留学し、ニューヨークのナショナル・アカデミー・オブ・デザインに学びました。同校で師事したE・H・ローに長い美術の歴史を持つヨーロッパに渡ることを勧められて1891年にパリに赴き、アカデミー・ジュリアンに学んで、翌年帰国します。1893年夏に9年におよぶフランス留学から帰国する黒田清輝、久米桂一郎とはパリ滞在中に会っており、1896年には黒田らとともに美術団体白馬会を創設し、日本の美術界に大きな変革をもたらしました。英語に堪能で、欧米の美術界の事情に通じ、作品の制作よりも美術批評や美術をめぐる制度の確立に尽力しています。

岩村は1911（明治44）年4月に日本で初めての『日本美術年鑑』を画報社から上梓します。かねてからの岩村の持論である「美術の定期刊行物は欧米に準じてイヤーブック（年刊）にマンスリー（月刊）とウィークリー（週刊）の三点を揃えよ」という主張が実現したものであったといえます。創刊まで十数年を要したとされますが、その理由は「我国に於ては前例なき企であるだけに、果してその編纂の費用と労力とを償ひ得るだけの購読者を集め得るや否やが危ぶまれたため、書肆は損失を惧れて実行を躊躇してゐた」からでした（清見陸郎『岩村透と近代美術』 聖文閣 1937年）。

画報社版『日本美術年鑑』の目次は、第一章 美術界一年史、第二章 美術展覧会、第三章 官職員（宮内省 大臣以下、東京帝室博物館等の職員録）、第四章 美術審査委員会、第五章 教育機関（東京美術学校以下私立川端画学校など、学校の歴史、開校の目的、規則、カリキュラム、教授名等）、第六章 美術館 東京、京都、奈良の帝室博物館等の創立年月日（これら3館については1年間に展示された作品リストも付す）、第七章 古社寺保存及国宝（当該年度に指定された社寺、作品リスト）、

第八章 団体（美術関係団体の創立年月、役員、会員名）、第九章 美術界の人物（美術関係の新聞記者、当該年の物故者名とその略歴）、第十章 美術に関する言論（美術文献目録、月別）、第十一章 美術に関する出版物（当該年に刊行された書籍、美術雑誌名リスト）、第十二章 統計（日本美術家分布表＝全国の美術家がどの都道府県に分布しているかを日本画家、西洋画家、彫刻家、建築家、彫金鍛金毛、漆器、図案、陶器・七宝、その他、学者・記者、官職に分けて人数を記す表、漆器、陶磁器、織物類の製造および輸出累計比較表＜明治40年から45年＞）とな



『日本美術年鑑 明治四十三年度版』
（画報社発行）扉

っており、附録に近世日本美術年表、日本美術家人名を付します。

今日、この年鑑は当時の美術界を概観できる非常に貴重な資料となっていますが、少ない社員で『美術新報』等の美術雑誌をも刊行する画報社にとって、年鑑の編集は「いかにも辛い仕事だった」と、これに携わった田辺孝次が語っています（田辺徹『美術批評の先駆者、岩村透』藤原書店）。創刊当初から危惧されていた通り、同年鑑は、第三巻を刊行したのみで廃刊となりました。

それから十数年後の1927（昭和2）年、朝日新聞社が『日本美術年鑑』を創刊します。朝日新聞社版は巻頭に当該年の美術展に出品された作品の挿図が百ページに及んで掲載され、本欄に美術界総覧、美術展覧会、美術工芸界、建築界、古美術（古美術界概観、入札界、展覧会一覧、古美術界消息）、美術界消息、文籍及出版物の章が、便覧に国宝・絵巻物、美術関係諸施設、博物館美術館、学校・研究所、美術団体、世界美術家年表の章が掲載され、巻末に現代美術家録が付されています。しかし、朝日新聞社版も1933（昭和8）年版で廃刊となります。

年鑑の内容は、50年先、100年先に高い資料性を発揮して評価されるもので、当代に於いては価値を理解されにくいものです。「イヤブックスは定期読者の獲得が難しく、どこの社のなんの年鑑にしろ半ば奉仕が義務とあって、別の手で得た利益を注ぎこまなければならない」という田辺徹氏の指摘のとおり、年鑑編集は営利を度外視し、当代の評価を求めず、将来に向けて、公共に資する信念を持ってやらねばならない地道な作業です。公的機関の事業であるべきで、美術研究所での刊行が開始されて初めて継続性が保たれるようになりました。

当所刊行版の創刊号となった昭和十一年版の目次を見ると、本欄は現代美術、古美術、美術行政、美術市場、文献目録に大きく分かれており、現代美術、古美術の欄のそれぞれに展覧会の記録があります。現代美術の欄に美術関係彙報と物故作家及美術関係者欄があり、今日の年鑑に美術市場の欄がないのを除けば、本欄の内容は創刊以来ほとんど変わっていません。創刊時は、便覧に国宝保存、重要美術品等保存、史跡名勝天然記念物保存、朝鮮宝物古跡名称天然記念物保存、著作権保護の欄に続き、美術奨励施設、美術研究施設、美術教育施設、美術観覧施設、美術団体、展覧会場、美術関係定期刊行物の一覧があり、美術家及美術関係者名簿が付されていましたが、現在の年鑑は本欄のみとなっています。

筆者が1984（昭和59）年に東京国立文化財研究所に入所した折、直属の室長であられた関口正之氏に「結婚しても、お母さんになっても、ずっと研究所で年鑑を作ってください」とのお言葉をいただきました。当時は、近現代美術研究を担当する美術部第二研究室と、古美術研究者で構成された情報資料部が年鑑の編集に当たっていました。コンピューターが普及する前で、全ての原稿は手書きでした。大先輩の関千代氏から「年鑑編集のことを思うとぞっとするわ」と伺い、中村伝三郎氏に「大変なのによく続けてくださってます」と慰労され、諸先輩の苦労を思い、その事業を繋いでいくことへの思いを強くしました。

全国の美術活動を網羅することが非常に困難になったうえ、美術の範囲も揺らいでいる今日、『日本美術年鑑』に課題が多いことは認識しています。電算化に対応した情報公開の形が求められているとも思います。こうした事業に同時代的評価が得にくい状況は明治期から変わりませんが、地道な編集作業を続け、創刊から75年を迎える蓄積を力として、他機関ではなし得ない美術研究情報の公開を目指していきたいと考えています。

（企画情報部・山梨絵美子）

『研究資料
脱活乾漆像の技法』の刊行



『研究資料 脱活乾漆像の技法』

企画情報部では、平成18年度から5カ年計画で進めてまいりました研究プロジェクト「美術の技法・材料に関する広領域的研究」の一環として、天平時代の脱活乾漆造の仏像の技法解明を目的として、調査研究を行ってきました。その5年間の成果報告を『研究資料脱活乾漆像の技法』として刊行いたしました。

本書では表面観察からだけでは窺うことのできない脱活乾漆像の像内の様子や技法を知るために行ったX線透過画像を含む図版(モノクロ)と、各作例の基礎データを収載しています。

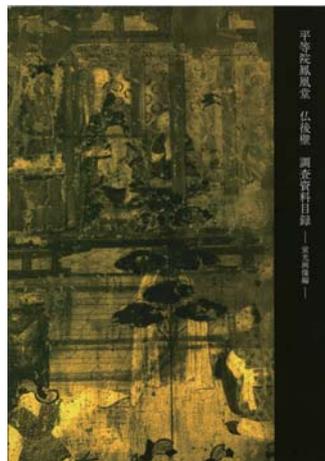
あわせて、この研究プロジェクトの一環として同時進行で行ってきた「奈良時代史料にみえる彩色関係語彙データベース」をCD版で作成し添附いたしました。

本書が今後の仏教美術研究はもとより、宗教文化史研究など様々な分野で広く活用され、学術的進展に大きく寄与することを期待したいと思います。

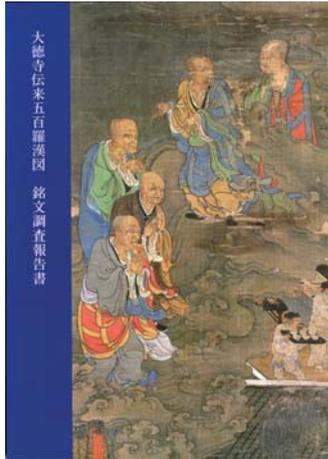
(企画情報部・津田徹英)

『平等院鳳凰堂 仏後壁
調査資料目録 一蛍光画像編一』なら
びに『大徳寺伝来五百羅漢図
銘文調査報告書』の刊行

企画情報部の研究プロジェクト「高精細デジタル画像の応用に関する調査研究」の成果として2冊の報告書を刊行することができました。ひとつは、『平等院鳳凰堂 仏後壁調査資料目録 一蛍光画像編一』です。これは、2004年から05年にかけて平等院と共同で行った鳳凰堂仏後壁の調査成果として平成20年度に刊行した『同一カラー画像編一』、平成21年度に刊行した『同一近赤外画像編一』に続く、第3冊目にあたります。この3冊の刊行によって今後、鳳凰堂仏後壁の研究を行ううえでの基礎資料となることが期待されます。もうひとつは、『大徳寺伝来五百羅漢図 銘文調査報告書』です。これは上述の研究プロジェクトの一環として、2010年より奈良国立博物館と「仏教美術等の光学的調査および高精細デジタルコンテンツ作成に関する協定」を結び、奈良国立博物館と共同で行った大徳寺伝来の「五百羅漢図」の調査・研究の成果報告書です。本書では、こ



『平等院鳳凰堂仏後壁 調査資料目録一蛍光画像編一』



『大徳寺伝来五百羅漢図 銘文調査報告書』

これまで肉眼では判読が難しかった画中の銘文の可視画像化して掲載しています。本書の刊行により銘文のほぼ全貌が明らかとなり、大徳寺伝来の五百羅漢図の制作事情の解明に向けて、大きな成果をあげることができました。

(企画情報部・津田徹英)

『東京文化財研究所蔵書目録8 漢籍編』の刊行

企画情報部では、研究プロジェクト「専門的アーカイブの拡充（資料閲覧室運営）」の一環として、『東京文化財研究所蔵書目録8 漢籍編』を刊行いたしました。これは



『東京文化財研究所蔵書目録8 漢籍編』

2002年3月に『同目録1 西洋美術関係 欧文編・和文編』を刊行して以来、順次、刊行を進めてまいりました蔵書目録の第8冊目に当たるものです。この目録では東京文化財研究所が所蔵する約12,000冊の漢籍を収録しております。目録の刊行により研究所所蔵の漢籍の全容がほぼ明らかとなり、今後、目録が広く活用されるで、当研究所の漢籍類がこれまで以上に利用されることが期待されます。

(企画情報部・津田徹英)

ロビー展示 「無形文化遺産の記録」

東京文化財研究所には、様々な無形文化遺産の記録が資料として所蔵されています。その一部を、調査報告とあわせ、パネル展示しています。



ロビー展示

今回の展示では、明治期に活躍した歌舞伎役者五代目尾上菊五郎の舞台扮装写真をはじめとして、国内最初期の音声資料となるSPレコード、東大寺修二会（お水取り）の調査記録、現在も継続して実施している講談の実演記録ほかを紹介しています。

(無形文化遺産部・飯島 満)

寄付金の受け入れ

東京美術商協同組合から東京文化財研究所における研究成果の公表（出版事業）の助成を目的として、また（株）東京美術倶楽部から東京文化財研究所における研究事業の助成を目的として、それぞれ寄附金のお申し出がありました。

3月4日、港区新橋の東京美術商協同組合で会談し、昨今の文化財に関する話題から画材に関する話題まで、多岐にわたるご質問、期待の言葉などをいただき、当研究所の調査・研究に対する期待の大きさが感じられました。会談後、今回ご寄付いただいたことに対して、東京美術商協同組合下條啓一理事長並びに（株）東京美術倶楽部浅木正勝代表取締役社長にそれぞれ亀井所長から感謝状を贈呈しました。

当研究所の事業にご理解を賜りご寄附をいただいたことは、当研究所にとって大変有難いことであり、研究所の事業に役立てたいと思っております。

（研究支援推進部・高柳 明）

人事異動

●平成23年3月2日付け

辞職

無形文化遺産部特別研究員（アソシエイトフェロー）・七海由美子

●平成23年3月31日付け

定年退職

副所長・中野照男

辞職

無形文化遺産部主任研究員・俵木悟

文化遺産国際協力センター長・清水真一

転出

研究支援推進部長・北出猛夫（奈良先端科学技術

大学院大学経営企画部長）

●平成23年4月1日付け

採用

無形文化遺産部研究員・今石みぎわ

保存修復科学センター研究員・佐藤嘉則

文化遺産国際協力センター特別研究員（アソシエイトフェロー）・楠京子

文化遺産国際協力センター特別研究員（アソシエイトフェロー）・山田祐子

転入

研究支援推進部長・六川真五（鳥取大学経営企画部長）

昇任

副所長（兼）保存修復科学センター長・石崎武志（保存修復科学センター長）

企画情報部主任研究員・江村知子（企画情報部研究員）

保存修復科学センター副センター長・岡田健（文化遺産国際協力センター国際情報研究室長）

保存修復科学センター主任研究員・早川典子（保存修復科学センター研究員）

配置換

企画情報部情報システム研究室長・二神葉子（文化遺産国際協力センター主任研究員）

企画情報部主任研究員・小林達朗（東京国立博物館学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室主任研究員）

保存修復科学センター修復材料研究室長・朽津信明（文化遺産国際協力センター主任研究員）

文化遺産国際協力センター長・川野邊渉（保存修復科学センター副センター長）

文化遺産国際協力センター国際情報研究室長・勝木言一郎（企画情報部情報システム研究室長）

文化遺産国際協力センター主任研究員・加藤雅人（保存修復科学センター主任研究員）

東京国立博物館学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室研究員・土屋貴裕（企画情報部研究員）

雇用の更新

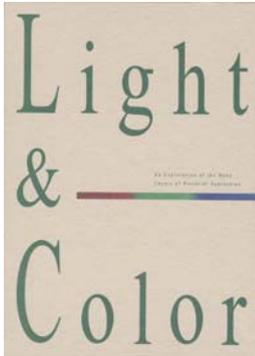
文化遺産国際協力センター特別研究員・有村誠

●平成23年5月1日付け

雇用の更新

文化遺産国際協力センター特別研究員（アソシエイトフェロー）・原本知実

刊行物のご案内



『Light & Color—
絵画表現の深層をさぐる』
光学理論やデジタル技術を応用した最先端の撮影手法によって形成した豊富な画像資料により、文化財の注目すべき様相に迫ります。2009年、中央公論美術出版（03-3561-5993）、定価37,800円



『日本美術年鑑』（平成21年度）
1936年創刊。「主要美術展覧会」「美術文献目録」など、わが国の美術界の動向を、基礎資料をもとに編纂しています。年史・展覧会・文献目録・物故者の4項目に分かれています。2011年、中央公論美術出版、定価10,500円



『無形文化遺産研究報告』
無形文化財・無形民俗文化財・文化財保存技術等を研究対象とする無形文化遺産部が、毎年の研究成果を報告する研究誌として平成18年度に発刊しました。なおその内容については、無形文化遺産部HP (www.tobunken.go.jp/~geino/index.html) でPDF版にて全文公開しています。



『伊藤若冲 動植綵絵』
動植綵絵全三十幅について、その修理過程および修理完了後に宮内庁三の丸尚蔵館と共同で行った科学的調査に関する報告書。調査研究編と図版編の2分冊構成。2010年、小学館（03-3230-5144）、定価52,500円



『コルセアKD431 文化財としての航空機修復』
イギリス海軍航空隊博物館において、保存修復されたコルセアKD431に関して、修復する途上で行われた調査や作業の状況を詳細に記録した本です。英文で発行された本書を日本航空協会が翻訳し当所が監修しました。2009年、オフィスHANS(03-3400-9611)、定価3,360円



『パーミヤーン仏教石窟の建築構造およびその意匠と技法』
パーミヤーン石窟のデジタル測量図面、および個々の石窟の形式と保存状態を記載した報告書。また放射性炭素年代測定法による分析結果と比較し、石窟の編年の再考察を行っている。2011年、明石書店（03-5818-1171）、定価13650円。

黒田記念館公開日カレンダー

●公開日：木曜・土曜 午後1時～4時 入館料：無料
 夏季節電のため6月30日(木)～10月8日(土)まで休館いたします。
 この間、7月16日(土)～8月28日(日)まで「近代日本洋画の巨匠
 黒田清輝展」を北海道釧路市立美術館で開催します。

June 6							July 7							August 8						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4						1	2		1	2	3	4	5	6
5	6	7	8	9	10	11	3	4	5	6	7	8	9	7	8	9	10	11	12	13
12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14	15	16	14	15	16	17	18	19	20
19	20	21	22	23	24	25	17	18	19	20	21	22	23	21	22	23	24	25	26	27
26	27	28	29	30			²⁴ / ₃₁	25	26	27	28	29	30	28	29	30	31			

ご案内

東日本大震災によって被災した文化財等の救援活動への募金の受付が、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団 (<http://www.bunkazai.or.jp/>) により開始されました。

お寄せいただきました浄財は、文化財救援事業に必要な資材の購入や応急保存措置の費用などに充実させていただきます。ご理解・ご協力を賜りたくお願い申し上げます。募金の振込先は次のとおりです。

三井住友銀行 上野支店 普通 6615496
 口座名義 (公財)文化財保護・芸術研究助成財団
 郵便振替 振替番号 00160-5-12319
 加入者名 (公財)文化財保護・芸術研究助成財団
 (通信欄に「地震」とお書きください)

編集後記

●今号では、2011年1月から3月までの活動についてご紹介いたしました。年度末にあたり、まとめや成果発表を目的とした研究会が多く開催されています。それらの成果についても、ウェブサイトなど様々な媒体でご覧いただけるよう、情報発信に努めてまいります。

さて、当研究所にはこの4月に「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」の事務局が設置され、宮城県・岩手県の被災文化財の安全確保に所をあげて取り組んでおります。東日本大震災では、発生から2カ月以上たった現在でも多くの行方不明の方がおいでになり、また物的な被害もはかりしれません。このような中で文化財の救援事業を行うことに抵抗があったことも事実です。しかし一方で、地域に伝えられ、大事にされてきた文化財は将来、ふたたび地域の

皆様のよりどころとなると考えます。

被災文化財の救援事業への皆様のご理解・ご支援を賜ればたいへん幸いです。

(企画情報部・二神葉子)

TOBUNKENNEWS no.45
 発行日：2011年5月31日
独立行政法人国立文化財機構
 発行：東京文化財研究所
 印刷：よしみ工業株式会社
 編集：企画情報部